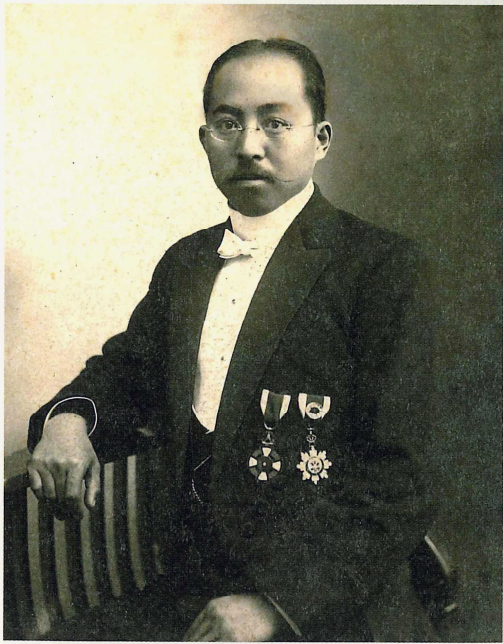


札幌農学校に留学生がやって来た ——北大最初の留学生

大学文書館 井上高聡



最初に本科を卒業した留学生陶昌善 (大学文書館蔵)

北大に最初の留学生がやって来たのは百十二年前、札幌農学校時代に遡る。一九〇二年四月に清国(中国)の留学生、周忠緯が札幌農学校農芸科(農業の専門技術を学ぶコース)に入学した。周は浙江省出身の二十七歳の青年で、日本語も十分に話すことができなかった。農学校の生徒たちは、最初の留学生を受け入れる態勢を整えるために奔走した。四月二十三日、農学校寄宿舎は、特例として周が本科(農学の専門知識を学ぶコース、現在の農学部)の生徒寄宿舎へ入舎することを認め、農芸科在学中は在舎できることを決した。翌二十四日に周は入舎し、二十五日には寄宿舎が歓迎会を開催した。

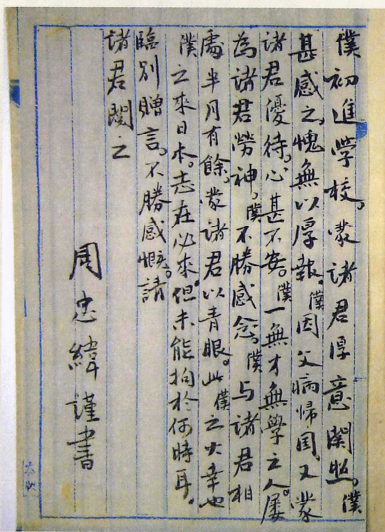
しかし、父親が病気になるため、周は一ヶ月余りで帰国せざるを得なくなつた。五月十一日、寄宿舎生一同が周を札幌駅まで見送つた。周は帰国に当たって、次のような意味の告別文を寄宿舎に残した。

諸君が僕を温かく迎えてくれたこと、心遣いをしてくれたことは感謝に堪えない。

共に過ごした半月余りの間、諸君は僕を歓待してくれた。僕は日本に来ることができて幸せであつた。いつになるか分からないが、必ずまた戻つて来たいと思う。

残念ながら周が再び札幌農学校を訪れることはなかったが、これを皮切りに、多くの留学生が北大へ進学するようになった。一九〇三年には四名の清国人が農芸科に入学し、三年後に二名が卒業した。一九〇四年には山東省農桑顧問の谷井恭吉(札幌農学校第十一期生)の引率で二十一名の清国人が農芸科や予修科(本科へ進学するための課程)に入学した。一九〇五年に予科に入学した陶昌善は、一九一一年には札幌農学校を改組した東北帝国大学農科を卒業し、戦前の

中国の農政で重きをなした。許農さん(二〇〇九年大学院文学研究科修士課程修了)の研究によると、一九四五年までに札幌農学校と北大農学部に在籍した留学生は、中国人三百六十六名、朝鮮人七十四名、モンゴル人二十六名、台湾人九名、インド人五名、タイ人一名の計四百七十五名であつた。現在の北大には約一五〇〇人の外国人留学生が在籍し、さまざまな国や地域の人がキャンパスを行き交う風景は珍しくなくなった。留学生の受け入れにおいても、北大は厚みのある歴史を重ねてきている。



最初の留学生周忠緯の告別文 (大学文書館蔵)